

(文献検討)

## ヒトのアロマザリングの概念の検討 —離島の「15の島立ち」の支援に向けた文献レビュー—

比嘉憲枝<sup>1)</sup>, 大湾明美<sup>2)</sup>, 田場由紀<sup>2)</sup>

キーワード: 離島, アロマザリング, 子育て支援, 重層的ネットワーク.

Key words: Remote island, Allomothering, Childrearing support, Multilayered Network

### I. はじめに

子育ては婚姻や家族の形態、労働観など諸文化や時代の影響を受ける。かつて、子育ては大家族の中で祖父母やきょうだいによって行われ、猫の手も借りたい繁忙期には近隣などの地域共同体の相互扶助で育てる風習があった(太田, 2010)。また、沖縄では、母親に替わって近隣の女子が通いや住み込みで子守をする「守姉(マイネー)」が存在していた(根ヶ山, 2016)このように、保育所などの保育環境が整備されるまでの子育ては、労働と生活が密着し、家族と近隣関係者で助け合う地域共同体による相互扶助で営まれていた。

現在の子育ては、高度成長期の都市部への移行によって始まった核家族化、女性の社会進出と労働者の被雇用化に伴う生活状況の向上によって、また、保育所の誕生によって、家族内の役割分担や地域共同体による相互扶助を喪失・脆弱化させた(山本, 2016)。

国は、母親の子育ての心理的な孤立や負担感を軽減し、子育てしやすいコミュニティ形成のためには、社会全体で子育てに参加できるしくみを構築する必要があるとし、基本方針に「子育ての社会化」を提言した(平成17年度版国民生活基礎調査, 2005)。そのため、一時預かり保育や子育て支援センター、幼保連携型こども園、認定こども園の設置など、保育サービスが整備・拡充された。結果として、子育ての社会化は、保育士などの専門職を中心とした保育環境の整備に力点が注がれ、利便さや子育て経費など親の都合が優先されやすいことをも招き、地域共同体による子育ての相互扶助を崩壊させつつある。子育ての社会化の推進によって、家族形態だけでなく社会全体のしくみの変化から子育ては影響を受けている。このように、子育ては、過去には母親以外の家族や近隣、現在は保育士などの専門職によって社会化されてきたが、子の育ちに焦点をあてた「子育ての社会化」とは何か?を再考する必要があるのではないかと。

ところで、高等学校のない離島では、高等学校等への進学や就職のために「15の島立ち」が行われている。「15

の島立ち」とは、中学校卒業と同時に島(親元)から離れ、島外で生活を始めることである。親にとって、15歳で親元から手放し、新しい環境で人間関係を作りながら自立・自律した大人にすることが子育ての目標になる。親は、島外の知人や親戚、高等学校の教員や生徒など、新たな子育て支援ネットワークを組み立てる「離れつつ守る役割」を担うことになる。これは、国がめざす社会全体で子育てに参加できるしくみとしての「子育ての社会化」の推進の実践例にならないだろうか?子育ては、「親の手(母親の手)」と「専門職の手(保育士など)」の二者択一ではなく、重層的ネットワークによる子育てが求められ、その方法のひとつとして「allomothering(アロマザリング)」があると考えられる。

「親以外の個体による(子の)世話」は、アロマザリングと定義されており(Wilson, 1975)、モノ・ヒト・シクミのそれぞれが相互に絡みあったシステムであると述べられている(根ヶ山, 2010)。アロマザリングに着目することによって、重層的ネットワークによる子育ての社会化が検討され、「15の島立ち」支援にも重要な示唆が得られると考える。

そこで本稿は、島内外の重層的子育てネットワークが必要な「15の島立ち」支援への活用可能性を検討するために、ヒトのアロマザリングの概念を整理することを目的とする。

### 用語の定義

子育て: 子育てとは、子どもの誕生から選挙権が与えられる18歳までの期間に、親と親以外の人々による、子どもが自立・自律した大人になるための関わりの総体とする。

子育ての社会化: 保育士、学校教師などの専門職だけでなく、親以外の家族、地域共同体の人々などの誰もが子育てに参加することとする。

## II. 研究方法

### 1. 分析対象文献の選定

文献の抽出は、発表年度を限定せず、キーワードを「アロマザリング」または「allomothering」とした。国内論

1) 公立大学法人名桜大学

2) 沖縄県立看護大学

文に関しては、国内の医学・看護学関連文献を収録している医学中央雑誌 web 版 ver. 5（以下、医中誌）と NII 学術情報ナビゲータの CiNii（以下、CiNii）を用いた。国外論文は生命科学や生物医学に関する学術文献検索エンジン PubMed（以下、PubMed）を用いた。医中誌 3 件、CiNii 24 件、PubMed 22 件から重複文献 5 件とチンパンジーの集団行動研究等の霊長類研究関連 22 件を除き、ヒトを対象にした研究論文 22 件（国内 14 件、国外 8 件）を抽出した。国外文献 8 件のうち、神経内分泌学に関する文献 3 件、医療や治療に関する文献 2 件、幼児の誘拐事例に関する文献 1 件、女性労働者に関する文献 1 件の計 7 件を除外し 1 件とした。また、アロマザリング関連書籍について、同様のキーワードと論文著者名でハンドサーチを実施し、ヒトのアロマザリングの概念の文化的変異

とその要因についての記述のあった根ヶ山らの著書 3 冊（ID16～18）を加え、分析対象文献は 18 件とした（表 1）。

## 2. データの収集と分析

アロマザリングの概観について、根ヶ山らの著書からヒトのアロマザリングの文化的変異とその要因に関する記述を抜き出しまとめた。書籍を除く選定文献 15 件について、アロマザリングの定義、アロマザリングを提供するアロマザーの範囲および子育てへの影響に関する記述を抽出し、意味内容が類似しているものを分類し命名した。

## III. 結果

### 1. ヒトのアロマザリングの概念の文化的変異とその要因

ヒトのアロマザリングの概念の文化的変異とその要因

表 1 選定文献リスト

ID	タイトル	発行年	著者名
1	今日の育児におけるアロマザリングとしての育児ネットワーク	2007	根ヶ山光一, 柏木恵子, 他
2	レジリエンス: 桶谷式断乳をめぐる考察(特集 子どもの発達におけるレジリエンス: 最新の脳科学から社会経済的な背景まで)	2017	根ヶ山光一, 相川公代
3	‘アロマザリングの島’における子育て	2016	根ヶ山光一, 中島伸子, 他
4	アロマザリングからみた 保育園と守姉~みんなで子育て 心理学からの提言~	2013	根ヶ山光一
5	日本の子育てを考える: アロマザリング・国際比較から(子ども問題シリーズ(4) 子どもと家族) - 家族と子どもが抱える課題とその支援-	2017	根ヶ山光一
6	子どもの身体・発達とアロマザリング	2016	根ヶ山光一
7	アロマザリングと保育所・幼稚園・学校、地域社会の役割	2017	根ヶ山光一
8	アロマザリングの島の子どもたち—多良間島の子別れ—	2016	根ヶ山光一
9	子別れ・アロマザリングから子育てを考える	2013	根ヶ山光一
10	Kowakare: a new perspective on the development of early mother-offspring relationship	2011	Koichi Negayama
11	3歳児未満児保育から見た、親子関係が青年期前後の人格形成に及ぼす影響について その3	2015	荻原英敏
12	子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(10)アロ・マザリングへの注目	2017	高田 明
13	社会的ネットワークの一環としての母性: 「アロマザリング」の視点から考える	2012	藤田 泉
14	子育ての‘手’をめぐる発達心理学: 沖縄多良間島の子守と保育から考える	2016	川田学, 根ヶ山光一, 他
15	沖縄・多良間村における守姉というアロマザリングの予備的調査—離島に残る子育ての憂愁を探る—	2013	白石優子, 根ヶ山光一, 他
16	共有する子育て: 沖縄多良間島のアロマザリングに学ぶ	2019	根ヶ山光一
17	アロマザリングの島の子どもたち—多良間島子別れフィールドノート	2012	根ヶ山光一
18	ヒトの子育ての進化と文化 -- アロマザリングの役割を考える	2010	根ヶ山光一, 柏木 恵子(編集)

について、根ヶ山らの3冊の書籍から関連する記述を抜き出しまとめた。アロマザリングは約70種類以上の哺乳類、特にチンパンジーやゴリラなど知能と高い社会性をもつ霊長類で見られる親以外の子育て行動である。Wilson (1975) は、アロマザリングを「生物学的(遺伝学的な)「母」または「親」以外の個体が同種他個体の子どもの養育をすること」と定義した。その後、ヒトの神経内分泌や生理学、進化の研究に応用を広げた。子育ては、ヒトの遺伝子に組み込まれているわけではなく、進化の過程で適応してきた種特有の環境におかれぬ限りうまく機能させることはできないとされる(根ヶ山ら, 2010)。また、集団性や社会性の進化、利他性と適応度との関係等の視点からとらえ直され(明和, 2010)、相互扶助、共同(協働)繁殖、協同行動など、社会行動の起源と進化や要因の解明として研究されるようになった(三浦, 2010)。

ヒトのアロマザリング行動が進化してきた背景には、認知能力の発達の影響が大きく、なかでも「協同行動」「積極的教育」など他者の心的状態を読み取り、非血縁関係に対しても恩恵を施す社会的活動とそれを支える心的メカニズムの働きの影響が大きいとされる(根ヶ山ら, 2012)。ヒトのアロマザリングは、ヒトの特性に支えられた社会的行動の一つであり、他者と共同で子どもを育てる過程で互いに共有される心地よさ、喜び、達成感などの共感力の進化によって影響される。ヒトのアロマザリングの進化には、子育てに参加する側、参加される側の双方に快の感情が喚起され、心的報酬として共有される強化の側面が影響する。

ヒトのアロマザリングは、婚姻や家族の形態、子守りや雇って働く等の育児観や労働観など諸文化の影響を受けて多様である。日本では乳母や農村地域のモリッコ(日本の子育ての風習で、赤子が産まれると近隣の7~13歳の少女が子守りとして選ばれること)(太田, 2010)にみられるような親以外あるいは地域共同体によるアロ

マザリングが存在したが、戦後の核家族化や専業主婦の増加等により、限局した母子関係に変化した。しかし、子は複数の集団成員による重層的育児ネットワークで育つとされ、アロマザリングは、「モノ・ヒト・シクミ」を介して母子が離れつつ子どもを守る仕組みである。また、アロマザリングの形態に関わる文化的諸要因のうち、文化的意味体系(育児観、ジェンダー規範等)と社会システム(地域の子どもへの関わり方等)が最も影響する因子であり、アロマザリングの形態が公共的か、家族や親族によるものかは、その共同体の子ども観によって異なると思われる(箕浦, 2010)。

アロマザリングは、安全管理や栄養面での課題は残るものの、若い世代が子の世話を通して育児行動を学習する機会になることや、子の母親の育児負担を軽減し、資源を母親自身に投資できること、世話を受ける子にとっては、母親から離れて集団内の多様な個体と出会うことによって社会化が生まれ、アロマザー自身(アロマザーを担う子)は、世話を通して責任感と乳幼児を育てるたのしさを覚えるなど、相互作用があり、それぞれの当事者にとってメリットがあるとされている(根ヶ山, 2010)。

ヒトのアロマザリングの概念的文化的変異は、霊長類に見られる親以外の子育て行動という生物学的養育行動にはじまり、その後、ヒトの認知能力の発達に影響を受ける社会的行動と位置づけられていた。また文化的変異の要因は、ヒトの心的メカニズム、婚姻観、家族観、共同体の子ども観、社会の価値観などがあつた。

## 2. アロマザリングの定義およびアロマザーの範囲

### 1) アロマザリングの定義

アロマザリングの定義については、12文献にみられ、8つにまとめられた(表2)。根ヶ山(2007)は、チンパンジーなどでは母親以外の個体が子どもの世話をすることがみられることから、動物行動学ではアロマザリングを【霊長類でみられる母親以外の個体が子どもの世話をすることである】(ID1)とし、藤田(2012)は、子どもの

表2 アロマザリングの定義

定義	文献番号
霊長類でみられる母親以外の個体が子どもの世話をすることである	ID1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 11, 13
動物行動学の分野の概念である	ID3
哺乳類でよく見られる行動だが動物の世界では特異な行動である	ID10
モノ・ヒト・シクミが関係し合う共同子育てシステムである	ID1, 4, 13
単なる母親の代行ではない	ID4
子別れ(母子の分離)の社会文化的基盤である	ID9
子どもが複数の養育者をもつというソーシャルネットワーク論の考え方に根拠を与える	ID6
世紀末以降の子育てと保育の考え方の転換期において一つの方向性を示唆するものである	ID12

養育に関与する視点において、保育園や学校などのモノと子育て支援や養子縁組などのシクミは、家族や専門職（ヒト）と相互に関連しながら子育てを行うアロマザリングであり【モノ・ヒト・シクミが関係し合う共同子育てシステムである】(ID13)と述べていた。また、根ヶ山(2013)は、「母子の分離は、文化社会的要因の関与が大きく、身体的反発性を一次枠組みとすれば、モノ・ヒト・シクミによる母子分離は別れの二次枠組みである」とし、【子別れ(母子の分離)の社会文化的基盤である】(ID9)と述べた。高田(2017)は、アロマザーによる協力的養育(アロマザリング)の研究者の主張は、母性神話を想定しておらず、急速に核家族化や少子化が進む日本の今後の子育てを見直すことにつながると述べ、【20世紀末以降の子育てと保育の考え方の転換期において一つの方向性を示唆するものである】(ID12)と示した。このように、アロマザリングの定義は、子育ての環境と文化を形成する営みであった。

## 2) アロマザーの範囲

アロマザリングを提供するアロマザーの範囲は、12文献にみられ7つにまとめられた(表3)。アロマザーは、父、祖父母、親類の【母親以外の家族】、守姉といわれる土着的な地域密着型の私的アロマザリングの【少女】、保育士、教師、助産師の【専門職】、保育園、幼稚園、学校などの【施設型の制度的アロマザリング】、教材、教科書、机、保健室などの【補助的アロマザー、モノ】、【幼年養子縁組】、【モノ・ヒト・シクミの組み合わせ】があった。

母親以外の家族や少女、専門職というヒトだけでなく、教育教材や教科書、机などのモノ、社会サービスや制度などのシクミまでを含めていた。このように、アロマザーの範囲は、人的環境(ヒト)だけでなく物的環境(モノ)、シクミまで包含していた。

## 3. アロマザリングの子育てへの影響

アロマザリングの子育てへの影響は、全文献にみられ、7つにまとめられた(表4)。

【子どもへのポジティブな影響】は、「ヒトの子育ての本質的な特徴は、共同子育てシステムの一部に母親も含まれ、その中で子どもが育つことである」(ID4)、「ヒトの乳幼児は、豊かなアロマザリングによって、多様な価値や個体に出会う機会を持ち、人間として社会の中で文化を獲得しつつ発達する」(ID9)があった。対して、【子どもへのネガティブな影響】は、「母親以外の子育てはゆがみを生じさせ、特に3歳未満児の育ちをゆがませる」(ID11)ことや、「職業的アロマザー(教師、保育士、教諭、医師など)は、母親の養育にも多大な影響を及ぼすが、促進的・補完的とは限らず、干渉的・相反的である場合もある」(ID7)ことの指摘があった。また、【母子関係や親子関係を変化させることへの影響】は、「養育者は、子どもと自分の状況を見定め、適切なアロマザリングのスタイルを取捨選択して活用している」(ID7)ことや、「ヒトの子育ては、子どもの廻りにサテライトのように存在する子育てを担うモノや個体と、子どもとの複数の最適近接ゾーンの中で、ダイナミックに展開される営みである」(ID6)があった。さらに、【地域ネットワークの広がりへの影響】は、「守姉と守子が家族同士を結合させて島のソーシャルネットワークを拡張している」(ID4)や、「守姉は地域のネットワークに開かれたアロマザリングで地域のネットワークを維持発展させる重要な要である」(ID8)ことがあった。このように、アロマザリングの子育てへの影響は、世話をうける子だけではなく、アロマザー自身(アロマザーを担う子)にも影響を与え、加えて、親子関係、家族関係、地域共同社会のつながりにも及んでいた。そして、その影響は文化や制度によっても異なっていた。

## IV. 考察

本研究の分析対象となったヒトのアロマザリングに関する国内外文献および書籍18件のうち、根ヶ山が第一著者または共著者である文献は15件であった。根ヶ山(2019)は、発達心理学の立場から、ヒトの子育ての本質

表3 アロマザーの範囲

範囲	文献番号
母親以外の家族(父、祖父母、親類)	ID1, 4, 6, 7, 9
少女(守姉:土着的な地域密着型の私的アロマザリング)	ID3, 6, 8, 9, 14
専門職(保育士、教師、助産師)	ID1, 2, 5, 7, 9
施設型の制度的アロマザリング(保育園、幼稚園、学校、乳児院、児童養護施設)	ID3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 13
補助的アロマザー、モノ(教材、教科書、机、黒板などの物品、保健室、環境等)	ID4, 5, 7, 9
幼年養子縁組、シクミ	ID1, 4, 6, 9
モノ・ヒト・シクミの組み合わせ	ID4, 7, 9

表4 子育ての影響に関する記述内容

記述内容	命名
アロマザーの存在は間接的役割であっても子どもの自立を促す(ID2, 10)	
「モノ・ヒト・シクミ」によるアロマザリングとは、モノ・ヒト・シクミのシステムとしての環境に、子どもがアロマザーを介して関わることを意味しており文化を学習することにつながる(ID4, 6)	
子どもは遊びを通して、守姉のネットワークに引き込まれることにより、多様な価値観に触れつつ様々な子供や家族との親密な関係を築くことができる(ID8)	子どもへの ポジティブな影響
守姉は少女によるアロマザリングであり、乳幼児は母親以外の養育者と親しくなることで、地域のネットワークに開かれた存在になり、同時に地域のネットワークを広げる積極的な役割も担う(ID3, 6, 8)	
ヒトの乳幼児は、豊かなアロマザリングによって、多様な価値や個体に出会う機会を持ち、人間として社会の中で文化を獲得しつつ発達する(ID9)	
ヒトの子育ての本質的な特徴は、共同子育てシステムの一部に母親も含まれ、その中で子どもが育つことである(ID4)	
保育園に子を預けることにより、地域に乳幼児の姿が見えなくなるため、潜在的なアロマザーである少年少女が子育てを乳幼児の子守りから学ぶ機会を奪うことにつながる(ID4)	
保育園の乳幼児は、安全な環境で保育が保証される反面、少年少女や地域の大人、動植物との接触が限定されている。「守ることは拘束すること」という側面も持っている(ID4)	
職業的アロマザー(教師、保育士、教諭、医師など)は、母親の養育にも多大な影響を及ぼすが、促進的・補完的とは限らず、干渉的・相反的である場合もある(ID7, 11)	
安全性を重視した保育によって、家や保育所など限られた場所や人との関係性にとどめることは、赤ん坊と世話をするヒト(少女や少年)のお互いの存在や社会を学ぶ機会を奪うことにつながる(ID6)	
母親以外による子育てはゆがみを生じさせ、特に3歳未満児の育ちをゆがませる(ID11)	
母親以外の子育てには子どもの育ちにゆがみを生じさせ、子供の意志がでたときに不登校や神経性食欲不振症の症状として表れ、成長とともに症状が重篤化、長期化し、死に至る場合もある(ID11)	
母親の体力と心理精神的な能力、時間、経済などの資源の投資は、繁殖(子育て)と自己実現の2つに同時進行的に振り分けることは非常に難しく、両親、特に母親は子育て中は、投資への満足感を求めない生活を工夫するべきである(ID11)	子どもへの ネガティブな影響
アロマザリングの一つである保育園での長時間保育推進によって、親子の接触時間が短時間となり、本来必要な母子間の愛着形成(アタッチメント形成)が希薄になっている(ID11)	
子供が保育者と信頼関係を形成するには時間がかかり、経験豊富な保育者の存在が(アロマザリングの一つである)保育園保育にとって重要であるが、保育勤務年数の短期化や人材不足が深刻であるため、保育園でのアロマザリングは難しい(ID11)	
核家族化や地域コミュニティ崩壊など、昔よりマザリングの重要性は増しており、母親には乳児の養育という重責が課せられているが、育児は母親など家族のみの責務ではなく、社会全体で行うものである、とのソーシャルサポートの考え方は危険である(ID11)	
両親の(自分の資源の)投資に関する満足感と子どもの不満は反比例的であり、青年期前後の精神問題の発症と関係することに早く気づくべきである(ID11)	
守姉に選ばれた少女は「友達と遊びたくても遊べない」という義務感を感じていた(ID15)	
子育ての負担の肩代わりを、他の個体(ヒト)だけではなく、モノも担うシクミを作ることで、子育てが多重的に行われ風通しのいい母子の関係となり子どもの社会性が育つ(ID4)	
ヒトの子育ては、子どもの周りにサテライトのように存在する子育てを担うモノや他の個体と、子どもとの複数の最適近接ゾーンの中で、ダイナミックに展開される営みである(ID6)	
養育者は、子どもと自分の状況を見定め、適切なアロマザリングのスタイルを取捨選択して活用している(ID7)	
親子は必ずしも身体接触を常に志向しておらず、子の世話を他のヒトにゆだねる行為は、ヒトやモノの導入による母子間距離の調整であり、文化や時代の価値観、モノの開発・普及と関連する(ID6)	母子関係や親子関係を 変化させることへの影響
母子の親和性と反発性は、両方存在しどちらも重要であり、お互いの最適近接ゾーンの大きさを変化させながら共存している(ID6, 9)	
母子の分離は、母子間の身体的反発性(母親の身体資源への子の依存と母親の拒否)だけではなく、さまざまな「ヒト」「モノ」あるいはそれが組み合わさったシステムとしての「シクミ」の介入によって達成される(ID9)	
子ども中心主義、共感的・献身的育児の風土が根強く継承されてきたが、社会的圧力によって導かれていた価値観であり、親子の健全な反発性を認める子別れ論は、日本の母親に必要な(ID9)	
守姉の風習は、守姉と守子の二者関係にとどまらず、両家の家族同士の交流が促進される(ID3, 5)	
守姉と守子によって血縁関係のない家族間に絆が結ばれる(ID4, 5)	家族間交流の促進 への影響
守姉は単に子守の手だけではない存在で家族間の絆をつないでいた(ID14)	

表 4 子育ての影響に関する記述内容（つづき）

記述内容	命名
守姉は義務感や責任感だけで役割を担っているのではなく、世話の楽しさや自分が抜擢されてそれを行っているという誇りの感覚によっても役割遂行を支えている (ID6)	
守姉は乳幼児の世話を通して「赤ん坊」とはどのような存在なのか、地域の中で赤ん坊がもつ役割などを学んでいる (ID6)	
守姉は志願する場合があることや、必ずしも子守りの手を必要としない場合でも守姉になった事例があり、幼子の世話だけではなく相互扶助的に行われ、世話に付随する「間接的なベネフィット(有益性)」がある (ID3, 9)	アロマザ—自身の成長への影響
子供の主体性や能力に対する大人の信頼感は、ケアラーとしての乳幼児の能力に対する信頼感でもある (ID6)	
守姉は義務感と同時に「誇らしさ」も感じていた (ID14)	
調査対象であった島の4歳児の気ままな集落の散歩は、親から完全に自由になって行動しており、親、きょうだい、親族に限らず多様な人々のネットワークからの支えがある (ID3)	
守姉と守子の存在が家族同士を結合させて島のソーシャルネットワークを拡張している (ID4, 5)	地域ネットワークの広がりへの影響
守姉は地域のネットワークに開かれたアロマザリングで地域のネットワークを維持発展させる重要な要である (ID8, 9)	
次世代を担う社会的資源として子どもをとらえ、社会全体で育児を支えていこうとする考え方に発展した (ID1)	
制度的アロマザリングである保育所と、地域密着型の私的アロマザリングである守姉は拮抗して存在している (ID3)	
土着の自然発生的なアロマザリングである守姉の風習は、少女の日常生活の場や遊びの場で行われる (ID3)	
保育園は、家庭の代替え環境ではなく社会が望ましいと考える育ちを子どもに保証すると同時に、保護者が就労などの社会進出を支える場である (ID4)	
保育園は子を預かり養育する養育モジュールと、親に子の発達を伝え、遊び方を見せて教える親の教育モジュールとしての機能をもつ (ID4)	
霊長類の赤んぼうの世話は親の負担が大きく、ヒトの親はさまざまなモノやヒトあるいはそれらを組み合わせてシステムを作り、ゆだねることによって負担を軽くし「離れつつ守る」ことを可能にした (ID5)	
ヒトと動物の子育ての生物学的共通性は、母親が子供を育てることであるが、ヒトの子育ての大きな特徴は、母子の周囲にアロマザリングの文化的多様性を持っていることである (ID5)	
ヒトによるアロマザリングは、専門家が組織的に関わっていることが特徴的で、繁殖が目的ではなく、契約に基づいた社会的機能をふまえて行われていることである (ID7)	
「モノによるアロマザリング」とは、教材や育児道具などを活用して子どもの養育を行うことであり、活用する「ヒト」と必要とする (ID7)	
アロマザリングは、小さなアロマザリング(専門職の資格や道具の製造システム等)が、より大きなアロマザリングの中に入れ子になって、重層的なシステムを構築しており複合アロマザリングという (ID7)	
子供の世話は、その子供と周りの(専門家ではない)大人の日常生活と深く関係していることや、場所や文化の影響をうけるため、アロマザリングには多様な形がある (ID5, 6)	文化や制度によって異なるアロマザリングへの影響
モノ(育児具等)、ヒト(父親や保育士など)、シクミ(保育園など)は、それらが母親の代替え機能を持つことを考えると広義のアロマザリングといえる (ID9)	
守姉の役割は「おんぶ」「授乳の時間に畑の母親の元につれていく」から「保育園への迎え」「遊び相手」へと守姉の生活リズムに合わせて変化した (ID15)	
保育所の子を預かり養育する機能と比較すると、守姉の役割は、短い時間帯で少女ができる迎えや遊びへの誘いなど限定的であった (ID13)	
守姉・守子は、「欠けると困る」という必須の存在ではなく、各家庭の事情や時代による異なる生活環境に合わせて「あるとよい」という存在として、双方の負担がない関係性で結ばれ、継続された (ID13)	
島の子育ては子の人数だけ親の手を取られ、『その手を補うための他者の手』が必要な状態であると捉えられており、守姉は、様々な『子育てを補う手』の担い手である (ID14)	
多良間島の保育所は、当時の保護者や村民の専門家による幼児教育への熱意によって開設され、母親の就業を助けると同時に孫の子守の第一人者であった祖母の時間的・体力的負担を軽減した (ID14)	
空路の整備や、農業の機械化、24時間送電、保育教員の確保など島の暮らしの近代化は、保育と子育て負担を軽減した (ID13)	
親と保育者に対してケアや教育の充実という過度な要求をする傾向にあるが、経済的・社会的・時間的条件は保証されておらずアロマザリングは発想の転換をもたらすと予測される (ID13)	
「複数の集団成因による重層的育児ネットワーク」による子育てに変わる仕組みとして、労働条件や働き方改善等、国や地方自治体の責任で「社会で子どもを育てる」仕組みを作る必要性が示唆された (ID13)	
ヒトの集団は協力的養育を行う集団の方が進化的に有利であるという協力的養育の研究者の主張は、母性神話を想定していないため、核家族化や少子化が進む日本の子育てを見直すことにつながる (ID12)	

的な特徴は、共同子育てシステムの一部に母親も含まれることであるとし、アロマザリングによって、子どもは多様な価値や個体に出会う機会を持ち、社会の中で文化を獲得しつつ発達すると述べていた。根ヶ山以外の著者は、社会心理学や文化人類学、教育学の立場から、ヒトのアロマザリングは「母親以外の個体が子どもの世話すること」の他に「子育てと保育の考え方の転換期において一つの方向性を示唆するもの」と定義した。文献検索の結果から、ヒトのアロマザリングに関する研究は、根ヶ山による研究が中心であり、「母親以外による子の世話」に焦点をあてた研究は少ないことが明らかになった。

現在の子育て関連の研究は、母子の愛着形成や、母親の育児不安とその軽減に関する研究が主流である。これらから、現在の子育ては「母子密着型」を前提とし、それ以外は、母親の代理としての消極的な役割であると捉えてきた結果、アロマザリングに関する研究は発展しなかったと考える。

我が国も、母親の子育ての心理的な孤立や負担感の軽減を重要視し、社会全体が子育てに参加する「子育ての社会化」を提言したが、専門職による保育サービス等の整備に比重がおかれた結果、子育てを「親の手(母の手)」と「専門職の手」のみにゆだねる仕組みになったと考える。今回の結果から、アロマザリングの定義は、子どもが複数の養育者を持つソーシャルネットワーク論の考え方に根拠を与え、単なる母親の代行ではないとの定義であった。また、アロマザリングを提供するアロマザーの範囲は、家族や少女(守姉)、専門職などの人的環境、学校や施設、教材などの物的環境、制度等まで広範囲に網羅していた。加えて、アロマザリングの子育てへの影響は、世話を受ける子にとっては、母親から離れて集団内の多様な個体と出会うことによって社会性が生まれ、アロマザー自身は、子の世話を通して責任感を学び、乳幼児を育てる楽しさを体験するなど相互作用があり、それぞれの当事者にとってメリットがあった。さらに、親子関係、家族関係、地域共同体のつながりにも及ぶことがわかった。アロマザリングの概念は、子の育ちに焦点をあてており、「子育ての社会化」について再検討する際の基本的な考え方を示す概念であった。

15歳には自立・自律できることを目指した子育てが求められる高等学校のない離島には、島内外に重層的子育てネットワークを構築することが求められる。アロマザリングは、モノ・ヒト・シクミが関係し合う共同子育てシステムであるとも定義されており、「15の島立ち」支援に活用可能であると示唆された。

## V. 本研究の意義と限界

本研究の意義は、ヒトのアロマザリングに関する文献検討から、アロマザリングの定義と世話を提供するアロマザーの範囲および子育てへの影響について整理し、親元から離れる子の「15の島立ち」支援に活用可能であ

ることを明らかにしたことである。しかし、国外文献データベースをPubMedに限定したことによって、論文の分野が限定されたため、今後は、文化人類系や社会学系の国外論文が検索できるデータベースを活用した文献検討が必要である。

## VI. 結論

1. ヒトのアロマザリングの概念の文化的変異は、霊長類に見られる親以外の子育て行動という生物学的養育行動にはじまり、社会的行動に進化した。その要因は、ヒトの労働観、婚姻観、家族観、共同体の子ども観、社会の価値観であった。

2. アロマザリングの定義は、8つが抽出され、母親以外の個体が子どもの世話をすることや、モノ・ヒト・シクミが関係し合う共同子育てシステムであるとの定義があり、子育ての環境と文化を形成する営みであった。

3. アロマザーの範囲は、人的環境(ヒト)だけでなく物的環境(モノ)、制度など(シクミ)まで包含していた。

4. アロマザリングの子育てへの影響は、文化や制度によっても異なり、世話をうける子だけではなく、アロマザー自身(アロマザーを担う子)にも影響を与え、加えて、親子関係、家族関係、地域共同社会のつながりにも及んでいた。

5. ヒトのアロマザリングの概念は、子の育ちへの影響から親子関係、家族関係、地域共同社会のつながりにまで及び、人的環境だけでなく物的環境、制度や文化まで包含していたことから、子育ての環境と文化を形成する営みであるといえる。

## 引用文献

- 太田素子. (2010). 第4章歴史の中のアロマザリング. 根ヶ山光一, 柏木恵子. (編). ヒトの子育ての進化と文化ーアロマザリングの役割を考えるー(pp75-93). 有斐閣.
- 川田学, 白石優子, 根ヶ山光一. (2016). 子育ての‘手’をめぐる発達心理学: 沖縄多良間島の子守と保育から考える. 発達心理学研究, 第27巻(4号), 276-287.
- 白石優子, 石島このみ, 根ヶ山光一. (2013). 沖縄・多良間村における守姉というアロマザリングの予備的調査ー離島に残る子育ての憂愁を探るー. 日本教育心理学会総会発表論文集, 55(0), 72.
- 中西さやか. (2017). 「子育て・保育の社会化」に関する研究動向と課題. 社会保育実践研究, 1, 51-54.
- 荻原英敏. (2015). 3歳児未満児保育から見た親子関係が青年期前後のヒト格形成に及ぼす影響について その3. 順徳大学短期大学部研究紀要, 第54号, 13-30.

- 藤田 泉. (2012). 社会的ネットワークの一環としての母性：「アロマザリング」の視点から考える. 平成音楽大学紀要, 12(1), 61-71.
- 船橋恵子. (2018). 「子ども・子育て支援新制度」に見る子育て社会化の特徴—ヨーロッパの先行事例と比較しつつ—, 大原社会問題研究所雑誌, 722, 17-32.
- 三浦慎吾. (2010). 第1章動物におけるアロマザリング - 哺乳類を中心に -. 根ヶ山光一, 柏木恵子. (編). ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える— (pp11-30). 有斐閣.
- 箕浦康子. (2010). 第5章アロマザリングの文化比較. 根ヶ山光一, 柏木恵子. (編). ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える— (pp97-30). 有斐閣.
- 明和政子. (2010). 第2章霊長類のアロマザリング - チンパンジーとヒトを中心に -. 根ヶ山光一, 柏木恵子. (編). ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える (pp33-52) 有斐閣.
- 山本由紀子. (2016). 「子育ての社会化」と子どもの育ち, 太成学院大学紀要, 18(35), 83-88
- 吉長真子. (2008). 日本における〈子育ての社会化〉の問題構造 - 教育と福祉をつらぬく視点から -, 東京大学大学院教育学研究科教育学研究室紀要, 第34号, 1-13.
- 根ヶ山光一. (2002). 霊長類を通してみたヒト乳幼児の母子関係 - 反発性の視点から -. Japan Phycology Review, 45(3), 399-410.
- 根ヶ山光一, 柏木恵子, 平木典子他. (2007). 今日の育児におけるアロマザリングとしての育児ネットワーク. 日本心理学会大会発表論文集71(0), WS017-WS017.
- 根ヶ山光一, 柏木恵子. (編) (2010). ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える—. 有斐閣.
- Negayama K. (2011). Kowakare : a new perspective on the development of early mother-offspring relationship. Integer Psych Behav, 45, 86-99.
- 根ヶ山光一. (2012). アロマザリングの島の子どもたち—多良間島子別れフィールドノート. 新曜社.
- 根ヶ山光一. (2013). アロマザリングからみた 保育園と守姉～みんなで子育て 心理学からの提言～. 心理学ワールド, 62, 5-8.
- 根ヶ山光一. (2013). 子別れ・アロマザリングから子育てを考える. 乳幼児医学・心理学研究, 22(1), 1-8.
- 根ヶ山光一, 中島伸子, 外山紀子他. (2016). アロマザリングの島における子育て. The Annual Report of Educational Psychology in japan, 55, 251-258.
- 根ヶ山光一. (2016). 子どもの身体・発達とアロマザリング, 子ども学, (2), 118-135.
- 根ヶ山光一. (2016). アロマザリングの島の子どもたち—多良間島の子別れ—. The Annual Report of Educational Psychology in japan, 55, 219-225.
- 根ヶ山光一, 相川公代. (2017). アロマザリングからみたレジリエンス：桶谷式断乳をめぐる考察. 乳幼児医学・心理学研究 26(2), 71-80.
- 根ヶ山光一. (2017a). 日本の子育てを考える：アロマザリング・国際比較から（子ども問題シリーズ(4) 子どもと家族） - 家族と子どもが抱える課題とその支援-. 児童心理, 71(12), 20-25.
- 根ヶ山光一. (2017b). アロマザリングと保育所・幼稚園・学校、地域社会の役割. チャイルドヘルス, 20(2), 48-50
- 根ヶ山光一. (2019). 共有する子育て：沖縄多良間島のアロマザリングに学ぶ. 金子書房.
- 厚生労働省. (2013). 「健やか親子21」最終評価報告書について. <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000030389.html> (2020年3月31日現在).
- 内閣府. (2015). よくわかる「子ども・子育て支援新制度」. <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/sukusuku.html> (2020年3月31日現在).
- 内閣府. (2016). 子育てをしたいと思える社会の構築に向けて, 平成17年度版国民生活白 [https://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h17/01\\_honpen/html/hm04000001.html](https://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h17/01_honpen/html/hm04000001.html) (2020年3月31日現在).